



ISSN 1882-7578

革命とハビトゥス

——メヌ・ド・ビランの『習慣論』とフランス・スピリ
チュアリズムの伝統

香 田 芳 樹

19世紀学研究 第1号(2008年3月)抜刷

19世紀学学会・19世紀学研究所

革命とハビトゥス

——メヌ・ド・ビランの『習慣論』とフランス・スピリチュアリズムの伝統

香 田 芳 樹

西田幾多郎は晩年のエッセー『フランス哲学についての感想』（昭和11年）でメヌ・ド・ビランの習慣論との出会いを述懐している。¹ そこで彼は、ビランがロックの経験論やコンディヤックの感覚論に影響を受けながらも、独自に主意主義的、理想主義的な立場から習慣を捉え直したことを評価している。注目すべきは習慣というような、「普通は、哲学的に重要な役目を有つとは考へられない」現象が、フランスのサン・アンチーム（sens intime）^{〔ママ〕}——これを西田は「内奥感」と訳している——の哲学をドイツ観念論やイギリス経験論から区別する重要な指標となっているという西田の指摘である。確かにフランス哲学史において習慣は重要な役割を担ってきた。習慣論を記したラヴェッソンや、習慣を道徳の起源としたベルクソンはすでに古典の評価を受けているが、現代でも反復の心理学的な意義を追究したドゥルーズや、社会学的視点からハビトゥスを階層形成の重要な要因とみたブルデューはフランス習慣論の連続した理論的基盤の上に立つ。もちろん彼ら以前にもモンテーニュやデカルトの優れた習慣理解があったことを忘れてはならない。彼らに共通するのは、当たり前でありながら日常生活を支配している法則に対する深い洞察であった。それは、フランス語のサン（感覚）が英語のセンスともドイツ語のジンとも違う意味をもっているところに現れていると西田は言う。サンが概念体系にとらわれない、「直覚的な物の見方考へ方」を可能にしていることを見てとった彼の慧眼は——自身は主題化することはなかったが——習慣論の本質を正確に看破している。日常世界とスピリチュアルな精神世界との境界をかき消したり、浮かび上がらせたりするのが習慣であることをビランは直覚的に捉え、その機能を解明することで二つの世界の共立的な構造を解明しようとした。以下では彼の習慣論を紹介し、この思索がフランス革命という時代とその学制的状況と密接に関連していることを論じる。

¹ 西田幾多郎全集 岩波書店 2003年、第7巻 312-315頁。西田は特にビランを敬愛し、当時留学中の山内得立に著作（特に習慣論）が入手できないかたびたび打診している。西田のビランへの傾倒は、「思想が共鳴するところがあって面白い」こと以外に、彼の「日記にあらはれた人物」像に対する共感もあったようである。参考：大正10年1月29日付書簡〔533〕全集 第20巻4頁。

1 メーヌ・ド・ビランと彼の時代

1.1 意志の哲学者

1799年10月6日、フランス学士院の国立道徳政治科学研究所 (L'institut national des Sciences morales et politiques) は、「思考の働きにおよぼす習慣の影響がどのようなものであるか明らかにせよ、すなわち、同じ行為の繰り返しがわれわれの知的機能のそれぞれにひきおこす効果を説明せよ」という題目で懸賞論文を募集した。結果的に受賞作はなかったが、メーヌ・ド・ビランの応募論文は高い評価を受けた。習慣に関する懸賞問題は一年半後の1801年4月6日にも再び出され、彼は前回の論文に大幅に手を加えて再度応募した。応募作は全部で7編、これをカバニス、ガンゲネ、レヴェエル・ルポ、ドノウ、デステュット・ド・トラシからなる委員会が審査し、全会一致でメーヌ・ド・ビランの受賞を決めた。1802年7月6日のことである。選考委員を代表してデストゥット・ド・トラシは、「本書は炯眼鋭く、微細で深い観察に満ちている。著者は学識と才能の豊かさを証明し、主題を大いに照らし、科学に新たな進歩をもたらすのに大いに能力がある」とビランを絶賛した。賞金は1500フランと金メダルだった。² なにゆえ研究所が二度にわたって同じ問題を世に問うたのかは不明であるが、第一回目でビランの論文がすでに注目を集めたことは疑いがない。研究所はおそらくこの気鋭の哲学者がさらに洞察を深めることを期待したのであろう。そしてまたこれは習慣論の確立が学会にとって焦眉の課題であったことを物語っている。

論文は委員会の薦めもあって受賞直後に印刷された。これは1841年にクーザンの編集によって *Œuvres philosophiques de Maine de Biran* として出版され、さらに1922年にティセラン編の全集に入れられた。西田が読むことのできたのはこの版である。

メーヌ・ド・ビランは自己の精神をフランス革命との対峙において形成したといっても過言ではない。生前彼は哲学者としてよりもむしろ行政官、政治家として著名だったが、これは彼が混迷を極めた時代と正面から向き合わざるをえなかったからにほかならない。彼は *»J'agis, je veux, donc je suis«* (われ行為す、われ意志す、ゆえにわれ在り) という言葉によって「意志の哲学者」とされる。人間の行動の根底に意志をみて、それが人間に自由を保障すると考えた哲学者は政治的転覆には失望したが、自由の精神が思考のアンシャン・レジームを粉碎することには期待をいだいた。アカデミズムから距離をおいた市井の哲学者という彼のライフスタイルは、彼に形而上学的な思考スタイルをゆるさなかった。1823年の日記に彼は、「だから、私たちの生きる通常の世界に降りていく哲学者が必要なのだ」と書いている。³ それは抽象思考が造りだしたあらゆるドクサから解き放たれた〈私〉が、現に生きる世界のありふれた体験をまづ記述できる哲学を構築することであった。

² *Œuvres de Maine de Biran*, éditée par Pierre Tisserand. (以後 T と表記し巻数をラテン数字で表記する。) Tom II, (*Influence de l'habitude sur la faculté de penser*), Paris 1922, pp. I-III. 本論では『習慣論』と表記する。

³ Maine de Biran: *Journal*, édition intégrale publiée par Henri Gouhier, Neuchâtel 1954-57, v.3, p. 209. ; 村松正隆：〈現れ〉とその秩序 メーヌ・ド・ビラン研究 東信堂 2007年、4頁以下参照。

メヌ・ド・ビランが近衛兵としてヴェルサイユ宮で国王一家を護り負傷したことは有名である。この時ビラン22歳。もっとも多感な時期に彼は政治的アンシャン・レジームが崩壊するのを目の当たりにしたのである。彼はモンテスキュー的理想である憲法制定に理解を示したが、王政の廃止を望んだわけではない。むしろ極端を嫌い中道を行く立憲王政論者だった。彼が革命後しばらくはパリに留まったのも目下の混乱も遠からず王権のもとに沈静化すると考えたからであろう。しかし期待とは裏腹に、1791年ミラボーが急死し、ジロンド派が国民公会で発言権を失うと、代わって山岳派に代表される急進的主張が幅を利かすようになる。1792年第一次恐怖政治の頂点をなす「九月虐殺」が起こると、ビランはパリを離れ故郷に戻る決心をする。パリを遠く離れた故郷ベルジュラックで思索に耽りながら、ビランはルイ16世と彼の妻マリー・アントワネットの処刑について聞き、マラーの暗殺、ダントン、ロベスピエールの処刑の報を受けたのである。ロベスピエールの失脚後、中央政府は1795年に彼をドルドーニュ県の行政官に任命する。これが彼と政界との最初のつながりとなった。その後總統政府の五百人會議の代表に選ばれてパリに出るが、97年のクーデターで解任され再び故郷に帰る。その總裁政府は99年ナポレオン・ボナパルトのブリュメール十八日のクーデターで瓦解している。その後ビランは1800年から故郷の市議會議員、02年県議會議員、05年県知事顧問、06年ベルジュラック郡長と政治家としての道を歩み始める。しかし彼にとってこうした人生行路は必ずしも本意ではなかった。彼はむしろパリに留まって哲学者として生計を立てることを望み、ソルボンヌ大学哲学科のポストを友人の推挙を得て手に入れようとするが、ナポレオンの反対に遭い諦めざるを得なかったことがわかっている。⁴ 彼に哲学の思い止みがたくしたのはフランス学士院の懸賞論文である。それはビランにとって、いってみれば遠ざかる哲学者への夢を繋ぎとめる淡い希望であったのかもしれない。1798年の「観念の形成の及ぼす記号の影響」という課題に答えることはできなかったが、しかし翌99年に出された「思考の働きにおよぼす習慣の影響がどのようなものであるか明らかにせよ」には論文を完成させ応募している。先に述べたように、結果的にこの論文は受賞とはならなかったが、ビランの哲学的思索の出発点となるものとなった。

1.2 フランス革命以降の科学

フランス革命はその自由の精神を先行する人文主義（フマニズム）から学んだが、政治的イデオロギーが高邁な古典復興の精神を受け継いで真の精神の自由を勝ちえたかという、これは疑わしい。それどころか指導者間の疑心暗鬼や権力闘争は恐怖政治かアナキズムという、自由とは似ても似つかない下等な政治形態しか生みださなかった。メヌ・ド・ビランが暴力や善意、悪意といった内的状態が人間を内側から支配する過程を解き明かしたいと考えたのは、革命後の混沌とした政治状況と関係がある。そのことは彼の次の言葉にも表れているので

⁴ Charles-Marie Dorimond de Féletz 宛の1808年の手紙を参照。(T VI). Gerhard Funke: *Maine de Biran. Philosophisches und politisches Denken zwischen Ancien Régime und Bürgerkönigtum in Frankreich*, Bonn 1947, S. 17.

はないだろうか。

「嫌悪や怒りの感情はそれ自体悲しい。善意は心地よく、本能や初期体験はわれわれにその感情をもっと広げ、さらに別の善意を求めさせる。しかし逆にこれとは別に、時として嫌悪にある種の喜びを起こさせる社会的人為的習慣もある。教育上の偏見や、時には理性でさえも人を断罪したり憎んだりする悲しい義務をわれわれに課したり、同情や不寛容の罪を犯させる。たとえ初めの悪感情が酷くとも、ある種の本能がそこから善意を発展させれば、反省や義務や、時には復讐心ですら一段落するだろうに」⁵

彼の生きたのは、理性、義務、習慣といった人間の在り方自体に疑問符が付された時代だったのである。

「自由」が人間の本質に関わる問題として意識されたのは16世紀である。宗教革命はそれを信仰の自由と、人文主義は人間性の解放と理解し従来のカトリックの教条主義と鋭く対立した。こうした自由をめぐる抗争の歴史は詰まるところ、理性の自由な行使に正当性を与えるための闘争だったといえるだろう。18世紀はそれゆえ理性の時代の幕開けを告げたといえる。あらゆる桎梏から精神を解放する理性はやがて武器となる。宗教改革期からすでにイデオロギー化した自由精神が政治的暴力と化すことはしばしば見られたが、18世紀フランスでも理想は暴力に踏みこまれた。

18世紀フランスの哲学にはこうした政治的ラジカリズムと対決しつつ、もう一度確固とした人間の定義を見つけだそうとするものだったといえる。ロックやヒュームのイギリス経験主義の流れを汲んでコンディヤック（1715-1780）が感覚論を完成させていたが、革命後のフランス思想界は彼の思想から出発した。⁶ 彼らの多くはナポレオンによって「イデオログ」と名づけられ、不毛な哲学論議を尊ぶ輩として攻撃された。またラロミギエール（1756-1837）のようにコンディヤックの愛弟子ながら、人間に内在する精神の力を主張して、師の機械的感覚論を批判した哲学者も現れた。こうした「唯心論」とも訳される精神主義（スピリチュアリズム）はその後のラヴェッソンやベルグソンへとつながるフランス近代哲学の原型をつくったが、それは同時に L. Cl. サン＝マルタン（1743-1803）の神智学や F. A. メスメル（1734-1815）のメスメリズムや動物磁気説として心靈学的な底流をなすこととなった。医学の分野では X. ビシャが組織論を書き、人体組織に内在する生命特性（*propriétés vitales*）を提唱し、生氣論（*vitalism*）と呼ばれる思想の先駆けとなったこともこうした思潮の上で理解されるべきである。革命後の思想的風景はそれゆえ形而上学、唯物論、唯心論、感覚論、経験論、生氣論、神秘思想が渾然と混ざり合っって奇妙な風景を織りなしていた。メヌ・ド・ピランはこうした状況下で習慣を論じたのである。本稿では特にコンディヤックやデステュット・ド・トラシの「感覚論」「記号

⁵ T II, p. 230, (1).

⁶ 当時コンディヤックの影響を受けて書かれた著作として、C-F. Volney の *Catéchisme du citoyen française* (1793), P. Cabanis の *Rapports du physique et du moral de l'homme* (1799-1802), Gérando の *Signes* (1799), P. Laromiguière の *Les Sensations et les idées* (1800), Lancelin の *Introduction à l'analyse des sciences* (1800), A. Destutt de Tracy の *Éléments d'idéologie* (1801-15) などが挙げられる。Funke (1947), p. 23 参照。

論」と、ビシャの「生理学」がビランの習慣論に与えた影響を考察していきたい。

1.3 コンディヤックとトラシの記号論

ビランの『習慣論』が懸賞論文として書かれたものであることは、この著作の性格を決定している。つまりそれは習慣一般についての哲学ではなく、「習慣が知性活動にどのような影響を与えるのか」という問いに対する答えなのである。その意味でビランには、知性論にもとづいて習慣の構造を分析せざるをえない制約があった。そしてここでの知性論とは感覚分析の上に築かれた「記号論」のことである。そのことはこの著作の構成を見れば明らかである。

第一部 受動的習慣

第一章 感覚への習慣の影響。持続的感覚と反復的感覚

- I. 持続的、または反復的感覚の弱まり方についての推測
- II. 反復によって変質する印象とは何か
- III. 弱体化するとき刺激的印象が必要になること

第二章 知覚への習慣の影響。反復的知覚。それがより明確になること

- I. 反復的感覚の弱体化。明確化の第一原因
- II. 器官における運動の簡易化と精緻化。第二原因
- III. 中枢器官での運動と印象の連合。第三の原因

第三章 連合的知覚とそこから帰結する習慣の諸判断

- I. 同時性によって連合された知覚
- II. 継続する順序によって連合された知覚
- III. 習慣的印象と観念の比較。そこから引き出される判断

第四章 感覚的であり想像に固有な習慣

第二部 能動的習慣

第一章 人為的記号と諸印象の連合。記憶とその異種の基礎づけ

第二章 経験について。機械的記憶の習慣について

第三章 経験について。感性的記憶について

第四章 経験について。表象的記憶について。この習慣を形成する適切な手段の指示

第五章 言語習慣あるいは同じ語の頻繁な繰り返しがまずどのように実在についてのわれわれの判断を基礎づけるのか。さらにわれわれが概念や観念に関してもつことができるものをどのように変えるのか

第六章 承前。判断に続くものの反復。論理の操作と方法への習慣の影響

第七章 結論

ビランは「習慣と知性」の関係を「記号」「感覚」「印象」「知覚」「記憶」といったキーワードで解明しようとした。ここから彼が、懸賞論文の出題者であるフランス学士院を多分に意識

していることがわかる。なぜなら審査委員の主査は当代きっての記号論者デステュット・ド・トラシだったからである。デステュット・ド・トラシはコンディヤックの正統の後継者であり、感覚論者であった。コンディヤック同様彼は知の根拠を感覚とした。なぜなら、何ものも知られることなく認識され得ないし、その知ることのもっとも単純な形式が感覚だからである。感覚から出発して観念の形成、知への統合過程を分解してみることが、人間の知的活動を解明することなのである。⁷ コンディヤックであれトラシであれ、人間の自我、もしくは実存は感覚することの上に築かれうるものなのである。後に見るようにビランはこうした感覚論から出発しながら、やがてそれと対決しつつ、自己の習慣論を完成させることになる。

フランス学士院の懸賞論文がトラシの発案であることは彼が前年の1798年に「学士院報告」に寄稿した『思考能力に関する論文』から推し量れる。そこにはこのフランス観念論の大家が習慣について並々ならぬ関心をもっていたことが記されている。彼の習慣の定義は簡明である。「なんらかの判断が我々のなかで頻繁になされると、その判断としてその同類とは我々にとって極めて容易になる。そして[...]容易な判断は我々の注意を引きつけないから我々に意識されなくなる。そこから、多数の判断がほとんど限りなく容易になり迅速になって、ほとんど意識されない無数の活動をほんの一瞬のうちにに行いながらそれを説明することが我々にほとんど不可能であるという事実がでてくる。」⁸ しかし、繰り返しによる行為の迅速化を説明することはできても、それがハビトゥスとして内在化する過程はこれでは説明されない。とはいえ、この単純な定義は、習慣を作るものが判断であり、その判断を形成するものが記号であることを明らかにした点で評価すべきである。⁹ ここから出発してビランは自己の習慣論を模索する。

コンディヤックの記号論から出発したビランは『記号論草稿』を記したが、完成させることはなかった。それは彼が記号論自体のもつ欠陥、すなわちそれでは情感や情動といった人間の心理的状况を説明できないことを予感したからであった。原理主義的感覚論者コンディヤックは人間を「感覚の集成」、それどころか「感覚の変形」とさえ言い切り、その感覚が観念や思考へと変形する過程を記号によって説明しようとした。記号とは恣意的（人為的）になることによって過去の経験を自由に再生できる道具となる。¹⁰ そして再生された経験の数々を結合（リエゾン）し、連合（アソシアシオン）したものが観念であり、その観念の連合が知識である。彼にとってこの経験－記号－観念の連合を容易にするものが習慣であった。観念と結びつかない経験は偶発的記号として習慣とも知識とも無縁である。たとえば熱いものを見ただけで熱いと感じる感覚は、以前に知覚した熱さの経験を記号が呼び出すからであるが、これは熱いものを見たという偶発的経験が偶発的記号であるからにすぎない。偶発的経験は受動的である。人間

⁷ 村松（2007）、19頁以下参照。

⁸ Destutt de Tracy, A. L. Claude: *Mémoire sur la faculté de penser*, Paris 1992, p. 161–172.

⁹ 三輪 正：デステュット・ド・トラシとビシャにおける習慣の問題、『カルテシアーナ』第9号1989年、1–12頁。佐藤国郎：メヌ・ド・ビラン研究『自我の哲学と形而上学』悠書館 2007年 37–48頁。

¹⁰ 北 明子：メヌ・ド・ビランの世界 経験する〈私〉の哲学 勁草書房 1997年 147頁以下参照。

が意志の力で自由に呼び出せない受動的感覚をコンディヤックは「想像」と呼び、「記憶」と区別した。記憶は人間が呼び出しのために作った恣意的記号を使って経験を呼び出すことができる。呼び出された経験は感覚そのものではなく、感覚した状況やしたもの名前である。コンディヤックは、繰り返しによって恣意的記号の使用を容易にするのが習慣であり、これによって感覚機能自体は衰えると考えた。しかしデストゥット・ド・トラシを始めとするイデオログやビランはこうした感覚と習慣の理解に疑問を感じていた。なぜならそれによつては、一部の機能は繰り返されることで強くなる（再生する）ことは説明できないからである。フランス学士院の懸賞論文はコンディヤックのこうした極端な感覚論をもう一度批判的に検証してみる必要性を示唆したものであった。

2 ビランの習慣論

2.1 習慣と慣れ

人が知覚作用によって受けた刺激がやがて消えていくか、意識されなくなる現象は習慣によって説明できる。感覚論の立場からは、印象は消えていくのではなく、習慣によって記号化され感覚に、つまり原因に戻っていく。例えば感覚にとりわけ強い刺激を与える「恐怖」をビランは次のように説明する。

「すでに見たように、驚きや不安や感嘆などといったさまざまな感情は、新たな尋常でない対象が現れるか、ずいぶんたってからもう一度ギクリとしないと起こらないことは、われわれは経験からそのつど気がついている。(知覚はずっと変わらないが)すべての感覚は対象が同じで見慣れたものになると消える。または、想像がその対象を予感し、先にイメージしてしまう習慣をもったり、判断が確かになり、容易で早くなるにつれてそうなるのである。」¹¹

感覚はわれわれが感覚する対象にまだ慣れていないときにもっとも印象深い。それはビランのいうように驚き、不安といった否定的感情の場合にもっとも顕著に現れる。不意に鳴った雷に悲鳴をあげた人も、それがひっきりなしに一定時間続くとさすがに驚きや恐怖に慣れる。さらに雷が鳴っていることがわかっている、つまり「知覚」はしていても、稲光から先取りしてまだ遠いことが判断できれば、それはもう恐怖の対象ではなくなる。おそらく四六時中雷が落ちているような地方に住んでいる住民がいれば、雷を恐れることはないのだろう。しかし注意しなければならないのは、感覚消失は慣れによって感覚が麻痺したり鈍化したから生じたのではないということである。ビランもいうように知覚自体は常にそこにあり、閃光や轟音を感覚しているのである。違うのは感覚が消えたのではなく、感覚が記号化されたということである。それはもはや五感に与えられた刺激ではなく、「雷鳴」「閃光」を伴った「放電現象」となり、予測可能なものとなる。いやそれどころかこの自然現象につけた「雷」という名辞それ自

¹¹ T II, p. 151f. このことをビランは「感受性が印象の原因の次元へと移行する」と説明している。(T II, p. 85).

体によって雷は習慣化（つまり記号化）され、把握可能な観念となったのである。感覚が消失するのではなく記号になること、つまり理解の一部になることこそピランのいう「習慣」なのである。こうした見解をピランはデステュット・ド・トラシから学んでいるが¹²、トラシが習慣の受動的性格をあまりにも強調しすぎることには同意しない。これだけでは、人が新たな形質を獲得していく過程、——例えば自転車に乗れるようになること——を説明できないからである。結論からいえば、印象を慣れによって無意識化する作用があることを認め、「受動的習慣」と名づける一方で、ピランは「能動的習慣」と呼ぶべき作用もあると主張した。ピランの習慣観が簡潔にまとめられている箇所を少し長いが引用してみよう。

「すべての意志的運動は、何度も繰り返されると、少しずつ簡単に速く正確になる。速さや正確さや容易さが増すにつれて、運動から帰結する努力、または印象も弱まる。この増加の最終段階で、運動は自分自身にまったく無感覚になり、運動が目指した成果やそれが作った印象がなければ、意識に現れなくなる。この二つの一般的でかつ恒常の原理はまったく同じやり方で、単純な運動性と知覚機能の同時発達に携わり、その後でそれらの機能の器官の類縁関係、もしくは同一性をはっきり示す。それらは第二に次のことを示している。外的運動の感覚器官は一方で完全に機能し、知覚が正確で精妙になるにつれ、他方で個人が行動面や、行動に形や徴を与える操作や判断の面で、次第にまったく盲目となる。それにつれて感覚器官の反応がだんだんと早くなり、簡単になり、努力がだんだん必要でなくなり感じられなくなる。すなわち、知覚の複合機能が、迅速さや余裕や明らかな受動性によって〈感覚〉というべきものに近づいていくことを示している。われわれの運動能力を、成果である簡便さに包みこむことで、習慣は、意志的行為と無意志的行為の境界線を、経験から得たものと本能的行為の境界線を、感覚機能と知覚機能の境界線を消していく。われわれが二つの機能の違いをはっきりさせようとしても、習慣はそれらをますます混同してしまい、最初期までそれが不分不離であることを示すのである。』¹³

感覚によって得られた印象は何度も繰り返されると弱まる。これは単なる忘却ではなく、繰り返されることによって非意志的に、つまり受動的になることである。印象を変質させる繰り返しをピランは習慣と呼ぶが、これは印象を弱める一方、他方でそれをより精緻で正確にする。それは、対象を知覚するとき以前ほど苦労を必要としないし、以前よりもっと詳しく知っているからである。これはピランの例では次のようになる。「音楽の初心者、指と弓を動かし、位置を決めるのにやっとなで、楽器から出た音をほとんど区別しない。触れる器官の動きは繰り返すことですばらしく容易になる。筋肉の努力は消えるか、演奏中もはと感じられない。』¹⁴ それまで努力しなければできなかったことが今や無意識でできるようになる。習慣はまさに、「経験から得たものと本能的行為の境界線」を消していくのである。その消滅の過程をピランは記号によって説明する。

¹² Tisserand, T II, pp. XXVIII.

¹³ T II, p. 102f.

¹⁴ T II, p. 105.

2.2 受動的記号と能動的習慣

ビランによれば記号には二種類ある。一つは〈記憶の記号〉であり、これは意志を使って記憶を再生するのに使われる。もう一つは〈想像の記号〉であり、これは習慣によって無意識に生み出される。

「われわれはこの著作の最初で記号を大きく二種類に分けた。一つは性質を同じくする意志の運動によって造られている。その記号はオリジナルから感覚印象を作り、感覚印象はオリジナルを区別し、固定し、呼び出す役目を果たす。それは記憶の最初の基礎である。もう一つはあらゆる印象からできている。それは習慣によって一束一からげにされている。その一つが息を吹き返すと、その他のものも再生させる能力をもつ。ここに想像の最初の動力がある。想像の記号は思い通りにはならない。」¹⁵

記号には「印象を作り、オリジナルを呼び出すもの」と、印象それ自体になってしまったものと二つある。前者には意志的な働きがあるが、後者にはない。また前者を後者に変えたのが習慣であるとされる。後者は想像と呼ばれ、意志の働きをすり抜けて、勝手に自己増殖する可能性がある。さらに見てみよう。

「それ(想像の記号)は個人の外にあるものであり、個人の意志には未知の原因である。意志はつねに機能を果たそうとするが、習慣は迅速さや簡便さを身につけさせて、それに気づくのを邪魔する。記憶の記号は原則的に(その記号の本性上)自由に使うことができる。しかし習慣はまたもやそれを感覚できないようにすることで、それを変形し、その本性を変え、その機能をゼロにする。このようにしてわれわれは、イメージや視覚像が最初の抵抗としてつけたオリジナルや記号の機能、つまりまずわれわれの外にくっきりそれらを刻みつけようとする運動がまったく認識できなくなる。同様に、音声印象を区別したり呼び出したりする際、習慣は声の動きに介入させない。われわれの初期能力が発展していくときに、習慣はこのような効果を果たすのである。つまり、それはその本性上区別されるべき二つの印象をどんどん近づけ、同じものと見なしてしまう。それは個人が自分なりに行動しようとするときに、単純な感覚と知覚や判断を分け区別をさせないようにし、最終的には呼び出しという意志的記号を想像の受動的記号に変えてしまうのである。」¹⁶

ビランは人間の知的活動を「記憶」と「想像」に大別する。二つとも眼前に対象を必要としない、抽象的な思考様式であるが、違いは「意志的運動」(les mouvements volontaires)の有無にある。人が記憶から何かを再生しようとするとき、そのものの像や名を思い出そうとする。彼は「名称」「視覚」「触覚」「嗅覚」「味覚」「聴覚」が与えてくれる「感覚印象」を使って事態を総合的に再生しようとする。刺激は一般に感覚器官に感覚されるだけだが、それらは知覚を通せば印象として記憶に刻み込まれる。この記憶に刻み込まれた「徴」が「記号」である。記号という言葉でわれわれは普段ただの名辞を思い浮かべがちだが、例えばあるものの手触

¹⁵ T II, p. 179.

¹⁶ T II, p. 179-180. 傍点原著者。

り、色、重さ、かおりといった感覚的なものも、現実の対応物をもつ「記号」である。そしてそれらの記号は感覚印象として保存されている。それゆえ感覚印象の第一の機能は「呼び出し」(rappeler)とされるのだ。それは行為を欲したときに、いつでも自在に呼び出すことができる意志的記号である。記号は人間の行動につねに随伴している。例えば、出勤する前に手帳で今日のスケジュールをチェックし、取引先までの道のりを確認して、商談相手の顔を思い浮かべながら商談の手順をシュミレーションするとき、記号を使って呼び出す記憶はもう一つの現実を形づくっている。しかしすべてを記号を使って呼び出さなければならないわけでもない。今日の仕事の手順を思い描きながら人は何気なくコーヒーマーカーにお気に入りのコーヒーを入れ、スイッチを入れる。テレビで今日の天気を確認しながら締めるネクタイ、ワイシャツのボタン、スケジュールをイメージしながらこぐ自転車。こうしたことは同じ朝の風景でありながら、ほとんど意識されずに行われている。いやこうしたことまでいちいち手帳を見て確認しなければならないのであれば、朝のひとときはもっと慌ただしくなってしまうだろう。当たり前で「習慣化」してしまった一連の行動は「知覚」や「判断」や「記憶」の回路を通さずに再生できる。ピランはこのような再生される感覚を「想像」(imagination)と呼んだ。これはわれわれの語感にある「想像」＝「空想」とは少し違う、さまざまなイメージ (image) の連合からなるイマジネーションなのである。朝起きたときの感覚、朝食をとときの感覚といった一連のイメージが次のイメージを喚起して、先の行動を誘発していく。それは人間に意志を使わず、まったくの受動を強いるが、その無意志性と受動性のおかげで、「抵抗なく」完全にそれを成し遂げることができるのである。逆に、すべてを意志の管轄下におかなければ活動できないとすれば、出勤するまでの数分ですでに疲れ果ててしまうことだろう。習慣化した行動はイメージの連合、すなわちイマジネーションによって自動的に処理した方がよいのである。習慣はわれわれの感性を鈍化させることで、過度の刺激にさらされないようにする重要な適応機能なのである。

しかしピランは、習慣がわれわれの印象を変化させるのは、それが受動的に得られたものの場合に限ると考える。意志的な運動は印象を徐々に消滅させるのではなく、それを多様にし、別の印象を作る。例えば聴覚はお気に入りの音楽を何度聞いても魅力的に感じる。色彩は何度も繰り返し見られると別の色に変わってしまうだろうか？感覚の中には習慣によって鈍くなるものがある一方、習慣によってその感度を維持し、それどころか鋭敏にするものもある。¹⁷それが能動的習慣である。

能動的習慣をピランは、「人為的記号によって観念連合を容易にし、また連合された観念の呼び出しを容易にすること」と定義している。これは受動的習慣が印象を無意識のうちに想像として再生するのは別の仕方で行われる。人為的記号とは「知覚と二次的に結びついて、持続的に繰り返されることで感覚されなくなった最初の運動にとって代わり、習慣の効果で失われるかべールをかけられるかした意識活動を更新し、印象を呼び戻しという運動機能に近づけ

¹⁷ T II, p.90.

て、それらを想像の領域から記憶の領域に移動させる」¹⁸ 記号である。習慣が印象を想像の領域に運びこむのとはまったく逆に、人為的記号は想像の領域から印象を記憶に運び出す。ということは人為的記号は習慣と正反対の位置にあるものだといえる。

2.3 ビシャの生理学との対決

コンディヤックやトラシから出発して独自の習慣論の建設を模索したビランは、その後、思索を深めるにしたがって、習慣の基礎には記号論や感覚論によっては汲みつくせない人間の身体メカニズムがあることに気づき、補遺や註によって自著を補っていった。形而上学的思考から離れて彼が選んだのは生理学との共同作業であった。後年の補遺にはそれゆえ X・ビシャの名前が多くみられる。マリー・フランソワ・グザヴィエ・ビシャ (Marie-François-Xavier Bichat 1771-1802) は組織学の名著とされる『生と死の生理学的研究』(1800年)で、生を物理-化学的な現象とは捉えず、むしろ生の背景にある生命力 (force vitale)こそ生命現象の源泉であるとした生気論 (vitalisme) を唱えた。¹⁹ 当時 A・ハラーによって提唱され、F・ホフマンによって発展していた生気論は医学界のみならず、メスメル磁気療法に代表されるように社会現象にまでなり、デカルト的機械的人間観を凌駕しようとしていた。例えばビシャと同時代人である代表的生気論者ブルーメンバハは、一般的な生命力 (vires vitales) として「収縮力」「刺激感受性」「感覚性」をあげるが、それに加えて生物の形態形成を指揮し、栄養によって生命体を維持し、異常からそれを快復させる力として「形成衝動」(nisus formativus) が存在すると仮定した。²⁰ 生気論の歴史的展開を調査したドリーシュは、ブルーメンバハが仮説にとどめたものを臨床で実証したのがビシャだとする。ブルーメンバハが形成衝動と呼んだものをビシャは「生命特性」(propriétés vitales) と呼び、すべての組織に備わった生命機能を決定する力と考えた。彼は生理学こそ生命の神秘を刺激と力学のメカニズムによって解き明かす学問と考えたが、それは機械論的生命観がいかに事実を無視しているか痛感したからである。そのことを次の一節がよく物語っている。「生命の機能は、どれも実に多彩な変化を被る。自然な度合いから逸脱することも多々見受けられるのだ！それらはあらゆる種類の計算を逃れる。ほとんど、示される事例の数だけ公式が必要になるだろう。それらの現象にあっては、なにも予測がつかず、なにも予言できず、なにも計算できない。もし物理法則が生命法則と同じ変動、同じ変化を被ったら、世界はどうなってしまうのだろう」(『一般解剖学』p. LII 以下参照)。²¹ この予測も計算もできない生命法則を解く鍵が「習慣」なのである。こうした生命観はビランに大きな影響を与えた。『習慣論』への補遺には次のような一節が見出される。

¹⁸ T II, p.196. 傍点原著者。

¹⁹ Bichat, Marie Francois Xavier: *Recherches physiologiques sur la vie et la mort*, Paris 1850. ビランとビシャとの関連については次の研究を参照: A. Bertrand: *Xavier Bichat et Maine de Biran, Archives d'anthropologie criminelle et de médecine légale*, 15 (1909), p. 434-443.

²⁰ 当時ハラーの生理学は「刺激感受性」と「感覚性」を区別したが、カバニスらは刺激が受動的にのみ感受されるわけではなく、それも動態を含んだ感覚の中で捉えられるべきであるとした。ビランもカバニスのこの理解に沿っている。

²¹ ハンス・ドリーシュ: 生気論の歴史と理論 (米本昌平訳) 書籍工房早川 2007年 50頁より引用。

「物体を粘膜組織に直接押し当てることで生じる感覚には慣れが基本的に影響する。粘膜組織は体内器官でありつつ、外部的には皮膚である。未知の物体、あるいは自分に触れた時の抵抗から生じる反発や圧迫感はすべて、現実には器官が損傷しなければ、すぐに消えていく。粘液組織は臭いに無感覚になるし、口は味覚に反応しなくなるし、尿道はずっと装着しているゾンデに慣れるし、胃や腸を被っている組織はどんな固形物質や流動物質を食べても無関心になる。圧迫感や抵抗感はこの場合まったく受動的で、同様に運動感覚が意志をもたなくなれば、それは習慣によってまったく消滅してしまう。」²²

こうした医学的知識をビランはビシャから学んでいるが、しかし彼に追従しようとはしない。

「ビシャは言う。『器官の深部では接触はつねに単一的である。(それは器官の初めでしか多様化しない。)膀胱は尿以外と接触しないし、胆嚢は胆汁としか、胃はたった一つの塊に還元される食物としか接触しない。感覚の単一性は知覚の無力化を引き起こす。知覚するためには比較しなければならないが、ここでは比較のための二つの術語が欠けている。』それは確かに正しいが、ビシャの言うような意味においてではない。現実の情感 (*les sensations affectives réelles*) はある状態と別の状態を頭で比較した結果生じるのではなく、有機体の状態がずっと同じように継続することにある。もし人格の形成がなければ、情動もないことだろう。これは、コンディヤックやボネや彼らに続く形而上学者たちが読み違えたデリケートな点である。分析の誤りは大きい。彼らは、単純な情動に人格があると考え、感情のある状態と別の状態の比較をしようとした。そして喜びや苦しみの激しさをこの比較から導き出せると考えた。ボネはそれどころか、人格はある変化から別の変化に移行する感覚にあるとまで言い切った。感覚には人格が前提とされているにもかかわらず、である。彼らはすべての機能をたった一つの感覚の中にどうしても見つけ、すべてをただ一つの力だけから説明したかったのだ。誤りはここにある。」²³

ある刺激が心地よかったり悪かったりするの、感覚がその刺激とそれ以外の刺激を比較することができるからであり、快感・不快感とは畢竟比較にすぎない、と生理学者ビシャは断言する。現に、ある刺激だけを感覚器官に与え続けられれば、それは快感でも不快感でもなくなる。それは異物を身体に挿入した際にもはっきりわかる。刺激にやがて感覚は慣れてしまうからだ。胃や脾臓や膀胱が好悪の感情をもたないのは、その接触相手がただ一つの刺激だからである。比較の対象がなければ、好悪感も起こらない。知覚とは刺激を好悪感をもって感覚することであり、比較を前提にしている。では情動(感情)は好悪をもっているのか、知覚に当たるのだろうか。そうであればそれは比較を前提として起こることになる。ビランは情動は知覚ではないと考える。それは情感が人間の変わらないある継続的部分、つまりその人の「人格」に本質をおくと考えたからである。この人格の上で人は努力し、意志的に認識・感覚する。この継続的人格こそハビトゥスによって形成されるべきものである。ハビトゥスによってビラン

²² T II, p. 87, (1). 傍点原著者。

²³ *ibid.* 同様に T II, p. 75 (1).

は、コンディヤックやボネやトラシのように人間を感覚の受動的総体として捉える見解を決定的に決別し、またビシャの提唱したような受動的な生命観から脱し、主体的能動的実存としての人間像を提示できたのである。

処女作であった『習慣論』にビランはその後にも継続して関わり、人間を形づくる力は何か、それによって形成される人間とはそもそも何かという問いに思いを馳せた。それは彼が形而上学的な「純粹習慣論」から「実践習慣論」へ向かう強力な動因となったのである。それゆえ習慣をめぐる考察は彼自身のいう「生きる通常の世界に降りていく哲学者」となるための道標だったといえるであろう。